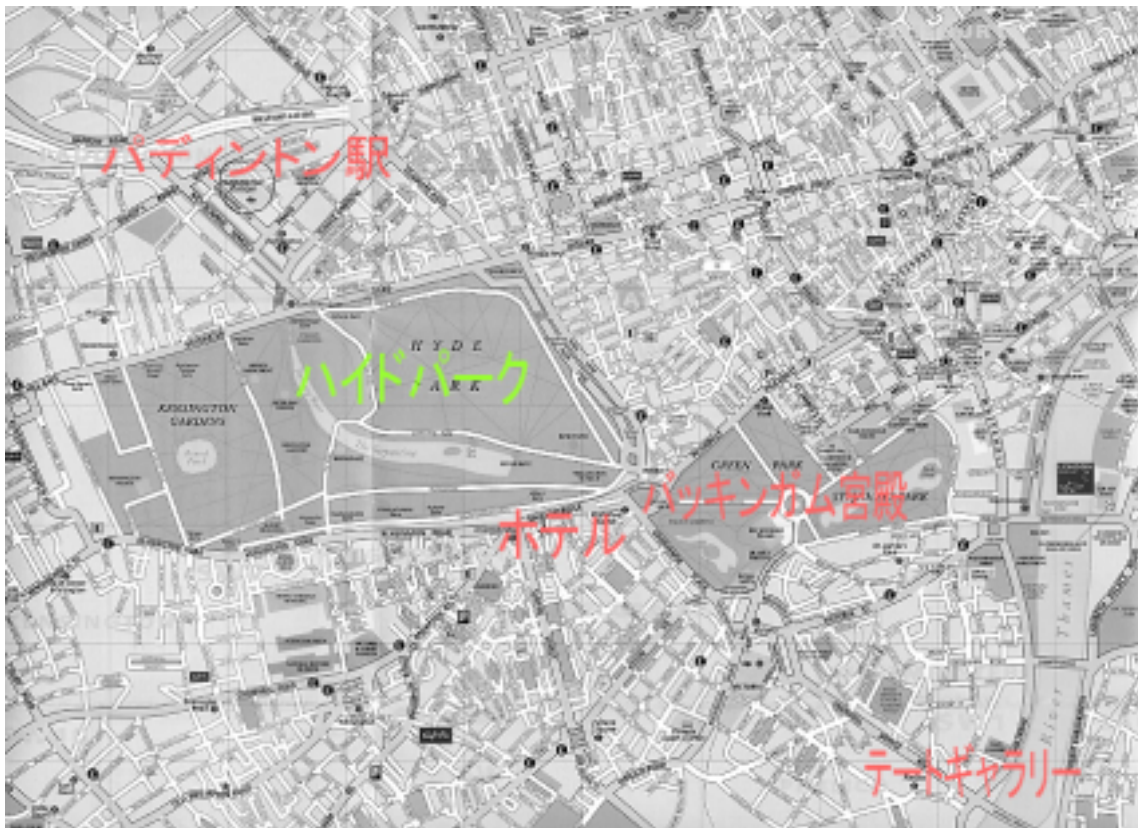


英国南部旅行(1999)

その13：ロンドン市内、帰路

7月31日(土)～8月3日(火)



英国南部旅行も実質2日を残すのみとなった。7月31日に地下鉄とバスが週末2日間自由に乗り降りできる週末旅行カード(Weekend Travelcards)を購入して市内を遊覧した。と言っても主にイギリスの伝統ブランド店を梯子したということであるが、Burberry(裏地がチェック柄のトレンチコートで有名)、Jaeger(英国伝統ブランド)、Aquascutum(ブリティッシュ・トラッドの老舗)、Austin Read(英国トラッドの老舗)、The Scotch House(スコットランドの家紋から始まったタータン・チェックで有名)、Harrods(ヨーロッパ最大の王室ご用達デパート)、Fortnum & Mason(紅茶の専門店)、Harvey Nichols(デザイナーズ・ブランドを揃えたデパート)、Liberty(小花模様のリバティ・プリントの本家)などを回った。EU圏外からの旅行者の場合、付加価値税(VAT)17.5%の払い戻しがあり、Harrodsはその場で手続きを済ませられるが、その他の店

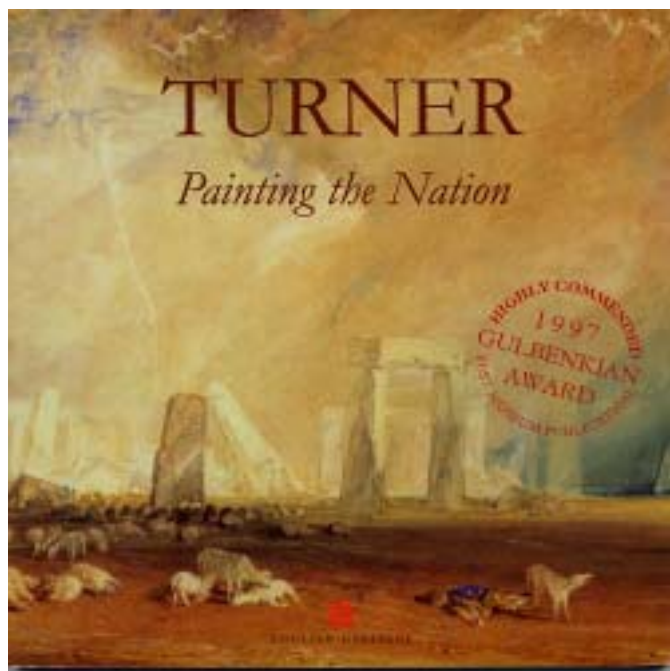


では手続き用の書類を発行してもらい出国のときに税関で証明印をもらい郵便ポストに投函すると後日、返金されてくる。クレジットカードの口座に返金されてくるのが普通であるが、ごく稀に小切手を送ってくることもあり、銀行で日本円に交換する場合の手数料が馬鹿にならず、何のための返金か判らない場合もあった。ガイドブックに「ロンドンに飽きたとき、その人は人生に飽きたのだ。」という文章があったが誇張ではないことを実感した。

左の写真はロンドン市内の地下鉄とバスの案内パンフレットで路線図のほか、いろいろな情報が書かれていた。

8月1日にはバッキンガム宮殿が8月と9月の限りウインザー城火災修復援助のため公開されていると言うので、チケットを購入するため朝9時にグリーンパーク（宮殿に隣接）のチケット購入場所へ行ったところチケットオフィスと行列用のテントはあったが誰も並んでいない

ので係員に聞いたところ売り出しは8月6日からで、今はその準備をしているとのことであり、空振りに終わった。その後、テムズ川の川岸にあるテートギャラリーへ行った。川に面した正面玄関は工事中で、仮設の入り口が脇にあった。ここは1897年にロンドン・ナショナル・ギャラリーの分館として創設された。砂糖商H・テートがコレクションと資金を援助したためにこの名前がついた。1987年にターナーの作品を収めたクロア・ギャラリーも開設され、油絵が300点、素描や水彩画が2万点近く展示されている。以前（1978）ロンドンを訪れたときにも、当時、留学していた友人の案内で、ここを訪れたがタ



ーナーのすばらしさに魅了されたことが思い出された。ホテルに帰ってからホテル周辺を散策した。写真左はホテル内にあるレストラン London Park Tower One の前、写真右はホテルの正面玄関である。



下の写真は 8 月 2 日朝ホテル付近を散歩したときの地下鉄ナイツブリッジ駅付近の写真である。



ホテルに戻り、タクシーを呼んでパディントン駅まで行った。タクシーに乗って行き先を云うと、運転手が同じ値段でヒースロー空港まで行ってあげるがどうかと問いかけてきた。おそらく空港まで行く客には同じような問いかけをしていると思う。私たちの場合はパディントン駅から空港駅まで運行が始まった列車に乗ってみたかったので、その申し出を断った。



パディントン駅は空港の玄関口に相応しく、一部改装されていた。搭乗手続と手荷物のチェックインができた。空港ターミナル 4 への電車も 15 分毎に出て

おり非常に空いていた。所要時間は 20 分程度である。車両は成田エクスプレスと非常に似ているが細かい点で、国民性の違いが出ているように思った。



今回の旅行(1)飽きさせないまちロンドン、(2)イギリスの田舎コッツウォルズ丘陵地帯、(3)紀元前 3000 年に建設されたと言うストーンヘンジ、(4)中世の大寺院や城などバラエティに富んだものとなった。特に、南海岸沿いに点在する城を見ると、人間の歴史は愚かな戦いの歴史であり、その状況は形こそ変わったが今もなお続いているばかりでなく、勝敗に関係なく人類の滅亡へ突き進む危険性をはらんでいる。